

GAKKAN GAKUFU 43



Interview

歴史のひだに「実践」された生を探る、実践する歴史学者 菊地 大樹 准教授

物静かな印象とは対照的に、菊地先生の語りからは、愛車のバイクにまたがって、研究の場を、その時代と領域を、果敢に、そして縦横無尽に越境する、「一歩先」を行く行動派の歴史学者像が浮かび上がってきました。日本中世史、鎌倉仏教という窓を通して、現代に何が見通せるのかを語っていただきました。



■ ご研究の一端に触れて、歴史学＝文献史学という先入観が見事に覆されました。先生がとてご自分の研究を楽しんでおられる印象を受けたのですが。

鎌倉仏教の道元、法然、日蓮といった人たちが残した文献の世界だけで完結するのではなく、どう実践の中でそうした文献が生まれてきたのかという、実践の方に興味があります。それは紙には残りにくいものですが、本来、宗教は教理と実践の両側面があって展開していくものだと思うんですね。だから「〇〇文書」あるいは教理文献の一つ決めて深く読んでいくという方法ではなくて、いろいろな断片的な史料に現れる実践面の活動をたくさん拾ってくるというやり方です。でも、ただあっちもこっちも食いつくだけではだめで、何か一つの史料を分析する中から、いろんなものを引っ張ってこいと、若い頃から指導されてきました。たとえば鎌倉初期の『古事談』に収められたさほど長くない説話から、法華経の聖である持経者と、阿弥陀仏の名号を唱える念仏者との関係、その背景としての中世の交通網、法然が残した教団の問題など、いくつもの情報を読み取ることができます。

学部・大学院時代の恩師はいずれも文献史学の大家ですが、実は民俗学の勉強もすごくしていたり、説話や和歌などの文学作品にまで研究領域を広げておられました。その影響もあり、とにかく使えるものは何でも使う、それでもやっぱり史料だけでは言えないことの一步先を思い切っ言う、そうボンと背中を押されました。

■ 東アジア文明圏という視座からみて、日本仏教にはどんな特色があるのでしょうか。

中国文明の周縁化の基本パターンは、朝鮮や契丹、さらにはベトナム・チベットなどと同じだと思うんです。しかし、その周縁化の仕方、中心との繋がり方はたぶん文化によっていろいろな違いがあったらと思うんです。日本仏教の場合は、中心を意識して、その本質がちゃんと分かっているながら、あえて自分を周縁化していくような感じがありますね。中世の日本で流行った本覚思想は、大陸の仏教が教理的な研究を重んじるのに対して、何も修行しなくても、もう成仏しているからそのままいいんだと言って、極端な場合には經典の書写とか読誦とか、法会とか説法とか、そういうものをすべて無意味化してしまう場合もあります。そこでは瞑想しながら自分の中にすでに芽生えている仏性を感じる修行というのが中心になってくるんです。このような周縁の世界の延長上に、夢告や呪術といった夢の世界が広がってゆくように思います。私はこのような中世人の感性的な信心の強さというものは、必ずしも身分とは関

係ないものであると思います。ここに、中国仏教の周縁としての日本仏教独自のあり方を見出せるように思います。このような列島における文化の一体性みたいなものは、13世紀頃には意識されるようになってきたのかなあ、という気がしています。

■ ご著書『鎌倉仏教への道』が出版されたのは東日本大震災の半年後でした。ここでは「実践」が重要なキーワードとなっています。先生ご自身、歴史研究者として今後いかなる「実践」を見通しておられるか、お聞かせいただければ。

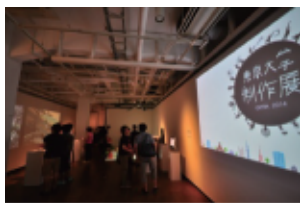


この本を書いた時点では、震災からまだ半年くらいのところ、自分が歴史研究者として復興のためにどうことができるか、まだほとんど見通しが立たないような感じでした。歴史的な文化財というのは復元されたからといって、それでただちに生活がよくなるわけでもないけれども、失われてしまった思い出を大事にし、土地や集団の記憶を保護していくというのが歴史研究者に課された役割なんじゃないかなと思いますね。

また宗教史研究者としては、最近はエンゲイジド・ブディズムといって、終末期の看取りやカウンセリング、セラピーみたいなものも含めて仏教の社会貢献ということが叫ばれています。私はそれを、伝統仏教から一歩前に出ているという意味でとても良いことだと思う反面、また近代的な学問なり教育制度の中で生まれてきたセラピスト、カウンセラーといったものに仏教の側がすり寄っていてもいいわけで、仏教あるいは宗教として独自に「これが出来ます」と言っているのかなあ、とは思いますが。私はやっぱり現代社会でも宗教は必要だと思うんですけれども、じゃあなぜそうなのかという問題には、まだ答えが出ていません。

その意味でも、今後は「山と人の生活誌」というテーマで、何かできないかと考えています。初心に戻っているような文献を手当たり次第に見て、断片的でもいいから自然と人間の交わりを示すような史料を集めてきて、文献には残らなかった実践的な宗教のあり方が持っている現代性みたいなものをあぶり出すことができないかと模索しています。多分研究するのは古代中世が中心になるはずですが、何がしか現代の宗教のあり方にも一石を投じることができればと思います。

制作展 extra2014



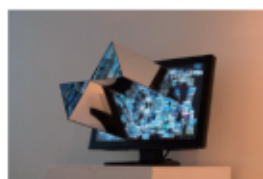
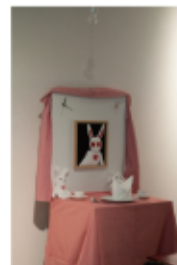
7月4日(金)から7日(月)までの4日間、『東京大学制作展 EXTRA2014』が、本郷キャンパス工学部2号館2階展示室及びフォーラムにて開催されました。この制作展は、情報学環・学際情報学府の授業の一環として学生が主体となり企画・運営を行う、テクノロジーを用いたメディア

アート作品の展覧会であり、2004年より毎年夏と冬の年2回行われています。

今回のテーマは「リアルからちょっと離れてる空間」でした。各作家が普段学んでいる最先端の技術やアイデアを、メディアアートとして皆様に楽しく体験していただきたい、そんな思いを込めたテーマでした。11月に開催を予定している『第17回東京大学制作展』の中間発表という位置づけで、準備期間は約3ヶ月と短い中、各々の思いを込めた11作品が一堂に会しました。

来場者数は、約550名と予想を大きく上回り、多くのフィードバックを得ることができました。一見難解に思われがちな技術を作品という形で表現することによって、多くの人に親しみや楽しさ、そして学生達が各々に込めた思いを伝えることができたのではないかと実感を得ることができました。

展示作品



着任教員自己紹介 大庭幸治 [おおば こうじ] 准教授



2005年に東京大学大学院医学系研究科健康科学・看護学専攻生物統計学分野を卒業後、それから約10年間、京都大学大学院、北海道大学病院において、臨床研究の企画・運営・解析・報告および、それらを統合した解析(メタアナリシス)の実施に、生物統計家として関与してきました。この度、7月より卒業教室である生物統計学分野に准教授で戻ってくることになり(兼任)、8月より情報学環でお世話になることになりました。

近年、臨床研究の様々な問題点が指摘され、一般社会からの信頼を大きく失っております。広く社会に還元できる臨床研究の実施ならびに熱意のある人材輩出により、信頼の回復に努めたいと考えております。今後ともよろしくお願い致します。

人事異動

教員

退職
6/30 岡本 剛和 准教授(総務省へ)
8/31 森 玲奈 特任助教(帝京大学高等教育開発センター・講師へ)
配置換(転入)
8/1 大庭 幸治(おおば こうじ) 准教授(医学部より)

事務職員

配置換(転出)
7/1 会計係(兼)研究協力係 矢野 雅彦 副事務長(法学部副事務長へ)
学務係 児玉 涼子 主任(教育・学生支援部奨学厚生課へ)
配置換(転入)
7/1 会計係(兼)研究協力係 松下 冬樹 専門員(工学部国際推進課より)
学務係 角田 俊行 主任(大学入試センターより)

夏季入試合格発表



8月29日、平成27年度修士課程・博士課程入試(夏季募集・平成27年4月入学及び平成26年10月入学)の合格者発表があった。修士課程の志願者数は、151名、博士課程の志願者数は、7名であった。夏季入試の最終合格者数は下表のとおり。

修士課程 最終合格者数	
社会情報学コース	15
文化・人間情報学コース	28
先端表現情報学コース	26
総合分析情報学コース	5
博士課程 最終合格者数	
総合分析情報学コース	3

大口敬教授 産学官連携功労者表彰 国土交通大臣賞受賞



このたび、平成 26 年度第 12 回産学官連携功労者表彰の国土交通大臣賞を頂きました。これは、大学、公的研究機関、企業等における産学官連携活動において大きな成果を収めたもの、または産学官連携活動の推進に多大な貢献をした先導的な取

組みなどを、内閣府を中心として表彰するものです。

今回は、国土技術政策総合研究所、自動車会社 5 社によるスマート交通流制御研究会、および私、の三者共同による取組みが受賞しました。大口は授賞式当日に海外出張中であつたため、研究室の和田健太郎助教が代理で賞を受けました。内容は、「高速道路サグ部等交通円滑化システム」の開発に関するもので、大口がこれまで研究してきた高速道路のサグ部（道路勾配が下り坂から上り坂に変化する箇所）における渋滞発生原因メカニズムに関する知見を提供し、民間の自動車会社が快適性を主

目的として実用化した ITS 技術の一つである ACC (Adaptive Cruise Control: 前方車に一定車間で追従する自動速度調整制御) システムを提供し、これを道路管理者による交通状況検知と情報提供技術に連動させた渋滞対策技術です。大学の研究成果にもとづいて、自動車会社同士の連携、および道路と自動車の協調により実現した共同研究・開発による成果が高く評価されたものと大変喜ばしく思います。

近年、日本の高速道路で ETC が普及し、料金所渋滞がほぼ解消した一方、サグ部を原因とする渋滞が 7 割に達し、国の根幹となる高速道路の交通機能を著しく損ねています。本研究がさらに実用化、普及へと進み、勾配が変化するだけで渋滞の原因になる現象が、いつか笑い話のように語られる日を夢見ています。(生産技術研究所教授、情報学環兼任・大口敬)



右から 3 番目：代理受賞の和田氏

石川徹准教授 ダブル受賞



この度、石川徹准教授が、日本都市計画学会 2013 年年間優秀論文賞（「利便施設の住宅地への混在に関する居住者の心理的評価」に対して）と、都市住宅学会 2014 年学会賞・論文賞（「都市の居住環境と用途混在についての居住者の意識の分析」に対して）を受賞した。それぞれ、2014 年 5 月 23 日と 5 月 19 日の学会総会において、授賞式がおこなわれた。

受賞対象となった論文は、縮小社会における新たな都市計画の必要性を念頭に、「性能規定」という考え方に焦点を当て、計画的な用途混合の可能性を、とくに居住者の認識や評価という視点から調べた研究である（大学院工学系研究科/空間情報科学研究センター・浅見泰司教授との共同研究）。ライフスタイルや価値観の多様化を背景に、

都市計画の分野でも多様性への対応が課題となっている。ただ、一口に「多様な居住者に応じた都市計画」といっても、その実現は容易ではない。実現するには、多様な居住者の考え方を把握し、その受容性を詳細に分析することが重要であるとの認識が、本研究の動機づけとなっている。

本研究は、まだ発展の余地はあるものの、都市計画における性能規定という考え方の適用可能性、および居住者にとって「適度な」用途混合について、僅かながらでも示唆を与えることに成功していたら幸いである。今後は、居住環境保護と生活利便性についての評価のトレードオフを考察するなど、さらに研究を進める予定である。ひいては、広く「空間—情報—人間の関わり」という観点から進めている空間情報関連の研究にも示唆を与えると期待している。(准教授・石川徹)

受賞報告

■公益社団法人土木学会 平成 25 年度出版文化賞

学環教員（田中淳教授、田中秀幸教授、古村孝志教授）が執筆者として参加した書籍『東日本大震災の科学』（東京大学出版会）が、公益社団法人土木学会の平成 25 年度出版文化賞を受賞しました。

■一般社団法人社会情報学会 第 2 回研究発表優秀賞

一般社団法人社会情報学会の第 2 回学会大会発表に關して、次の 2 名の学環学生が第 2 回研究発表優秀賞を受賞しました。

- 中野 邦彦「地域 SNS への地方自治体職員の関与と実態に関する考察」
- 堀川 裕介「スマートフォンによる青少年のインターネット依存および親子関係と依存の関連」

BOOKS

『コミュニケーション論をつかむ』

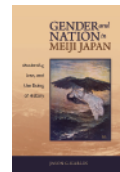
辻大介、是永論、関谷直也著 / 有斐閣
2014 年 5 月



コミュニケーションとはどういう営みであるのかを、身近な例を用いて平易に解説する。社会学、心理学、言語学、経営学など様々な研究知見を盛り込みつつ、言語や談話、うわさや流行、マスコミ効果研究の学説や方法論、スポーツ、初音ミクから災害までを論じる。学環ゆかりの著者らによる入門書。

『Gender and Nation in Meiji Japan: Modernity, Loss, and the Doing of History』

Jason G. Karlin 著 / University of Hawaii Press
2014 年 5 月



本書は近代日本における流行というメディア現象を、明治期の日本の世相や思想を描写する多数の資料を使って、ジェンダー論的分析を試みる。当時の「移ろい」と「永遠」の言説との関係性を明らかにすることにより、ジェンダーアイデンティティの形成とナショナリズムの台頭のプロセスを説明するものである。

学環・学府 研究倫理ワークショップシリーズ



左から、喜多唯氏、近藤和都氏、佐藤寿昭氏
「研究不正から自分の身を守るにはどうすればよいか？」(III/GSII Research Ethics Workshop Series: How to Protect Yourself from Research Misconduct?)の第一回会合が開催された。

近年、研究倫理の重要性が指摘されており、学環・学府においても研究倫理を推進するためのさまざまな取組みが行われている中で、こうした取組みをさらに拡充するための新たな試みとして、このワークショップシリーズが企画された。ここでは、教員が一方向的に研究倫理を教えるのではなく、教職員と大学院生が一緒になって、「研究不正から自分の身を

7月18日(金)に工学部2号館9階92B(プレゼンテーションルーム)において、学環・学府 研究倫理ワークショップシリーズ

「研究不正から自分の

守るにはどうすればよいか？」という観点から、ボトムアップでディスカッションを行い、学府における来年度の研究倫理教育プログラムを構築していくことを目指している。

第一回会合では、学府の大学院博士課程1年の喜多唯氏、近藤和都氏、佐藤寿昭氏をパネリストとしてお招きして、各パネリストのプレゼンテーションが行われた後に、学府において来年度に「研究倫理」という名称で新たな必修授業を行う際にはどのような内容や方法が望ましいのか、また、個々人が研究不正に追い込まれないためにはいかなる環境整備が必要か、といった論点にも踏み込みながら、熱の籠ったディスカッションがなされ、今後の学環・学府における研究倫理の推進体制のあり方を考えていく上で大変貴重なものとなった。

第二回会合は、今年の秋に開催を予定している。学環・学府の教職員・大学院生のみならず、是非、今後とも、積極的なご参加をお願いいたします。(研究倫理担当者・山口いつ子、学務係長・渋谷 哲)

第二回東京大学・ソウル大学学生討論会

2014年7月31日(木)、「第二回東京大学・ソウル大学学生討論会」(主催:東京大学、ソウル大学、東京大学大学院情報学環現代韓国研究センター、ソウル大学国際協力本部)が福武ホールにて開催された。東京大学からは34名(大学院生・留学生担当職員も含む)が、ソウル大学からは31名の学部生の計65名が参加した。全体テーマに『日韓の未来と青年交流』を掲げ、下記の通りの討論テーマに分かれ三つの言語で討論を実施した。

【日本語グループ】

<J-1 チーム>「日韓は『ネトウヨ』とどう向き合うべきか」

<J-2 チーム>「日本内の反韓的言論と外交への影響、法的規制の必要性」

【韓国語グループ】

<K-1 チーム>「韓国中高教育における漢字教育に対する提案」

<K-2 チーム>「韓流ブームの傾向について」

<K-3 チーム>「日韓両国の三放世代(結婚、恋愛、出産)」

【英語グループ】

<E-1 チーム>「国家安全保障—今日の東アジアではどれほどの軍備が正当か?」

<E-2 チーム>「慰安婦像をめぐる日韓の歴史認識の差異とメディア事情」

※ E-2 チームのプレゼンテーションは難波阿丹(石田英敬研究室・博士課程)さんが担当。

当日は参加者全員による「全体活動」と「討論チーム活動」の二部構成で進行し、「全体活動」は「チーム活動」の前後で実施した。最初の「全体活動」においては、各討論チームのプレゼンテーション担当者が、テーマを選択した理由や討論の目的について各自の討論言語で説明した。「討論チーム活動」では、約二時間でプレゼンテーションを聞いたお互いの意見を交換し、様々な角度からテーマを検討、日韓の認識の差やその原因分析はもちろん、各参加者が考える具体的な解決策をも披露しあった。各チームの討論内容は、両校から各一名がチーム代表として討論の内容や感想を日本語と韓国語でそれぞれ発表し、チームを超えて討論の成果を共有した。参加学生たちは、ホワイエで開催した立食式の夕食会でも話が尽きなかった。討論会後には東大側の参加者の有志が声を掛け合い、観光地を案内するなどしながら再会した学生も少なくない。インターネット上でも非公開の意見交換の場を設けるなど、討論会後も交流を深めている。当日は、日本や韓国の新聞社やテレビ局から取材も受けるなど、本討論会は学外からも関心を集めた。(特任講師・長澤裕子)



あとがき

今年度からニューズレターの編集に参加することになりました。何もかもが初めての経験で、まごつくことばかりでしたが、他の編集委員の方々と、何よりインタビューに応じてくださったり、原稿をお寄せくださった先生方の助けによって、なんとか今号を無事送り出すことができました。同業異種の先生方のご研究のお話や、学会内外で高い評価を得られたお話など、同業者として刺激を得ることができたことが、編集担当者としての最大の役得であったと思います。知を究めようとする喜びを、改めて教えていただきました。記して感謝申し上げます。そして、読者の皆様にもそうした思いが伝わればいいなと願っています。(真鍋祐子)

学環学府 43 10.2014

東京大学大学院 情報学環・学際情報学府

Interfaculty Initiative in Information Studies
Graduate School of Interdisciplinary Information Studies,
The University of Tokyo

〒113-0033 東京都文京区本郷 7-3-1

編集委員：真鍋祐子・岡田美保・暦本純一・佐藤彩夏
mail : news@iii.u-tokyo.ac.jp / <http://www.iii.u-tokyo.ac.jp>